

# 生徒の自己評価力を高める 教員の対話的な関わりとは？

巻頭13ページでもご紹介したように、中央教育審議会の答申では、生徒たちの自己評価力を高める必要性とともに、「教員が対話的に関わることで、自己評価に関する学習活動を深めていくことが重要である」と、対話の重要性を強調しています。では、生徒の自己評価力を高める対話とはどのようなものなのでしょう？

キャリア発達の観点からキャリア・カウンセリングを研究している追手門学院大学の三川俊樹教授と、実際に生徒との対話にキャリア・カウンセリングを取り入れている北谷高校<sup>ちやたん</sup>の先生方にお話をうかがいました。

## Prologue

### 導入ワーク

生徒との対話をイメージしてみよう



## Case Study

### キャリア・カウンセリング実践事例

キャリア・カウンセリングの視点を取り入れた学校活動を実践している北谷高校(沖縄・県立)の取り組み



## Epilogue

### 「キャリア・カウンセリング」とは？

三川俊樹教授(追手門学院大学)インタビュー

## Question

## 【下記の生徒に、皆さんならどう応えますか？】

※状況:入試の1週間前に不安になって相談に来た生徒

自分なりにはがんばってきたんですけど、試験に合格できるでしょうか？



生徒

◎皆さんが生徒にかける言葉を考えてみましょう



先生

皆さんがかけた言葉によって、その後どんな会話がつづくかイメージしてみましょう。

キャリア・カウンセリングとは、  
生徒の成長や発達につながる  
「適切なコミュニケーション」のこと生徒自身の気づきを促す  
教員からの働きかけとは？

ポर्टフォリオや「キャリア・パスポート」(仮称)は、生徒が日々の学校活動の中で学びや気づきを記録し、積み重ねていくものだ。※以下(仮称)は略。生徒たちは教科学習に限らず、部活動や行事など、あらゆる活動の中で成長していくが、自分の成長を漠然と感じることはできても、言語化して表現することは容易ではない。そのため、「教員の対話的な関わり」が必要とされてくる。

こうした対話が「キャリア・カウンセリング」なのだ。追手門学院大学の三川俊樹教授は解説する。

「キャリア・カウンセリングは進路指導などの特別な時間に行うことではなく、生徒との日常的な会話の中で、生徒の心の成長や発達につながり、生徒自身が自分について考えられるように導く対話のことです。つまり、生徒に気づきをもたらす意図をもった、教員からの「コミュニケーションのことなのです」(三川教授)

それをイメージしてもらうために、三

川教授が教員研修などで参加者に向けて実施しているのが上記の会話に始まるワークだ。参加者が先生役と生徒役のペアになって、生徒役の人が上記の生徒の発言をするところから始まる。

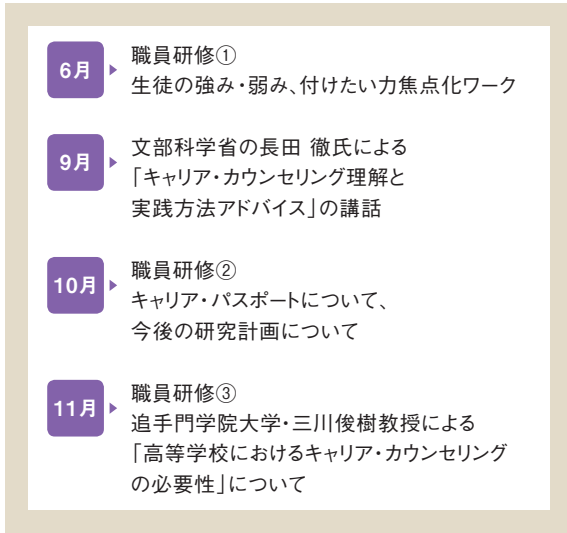
5〜6往復の会話を重ね、最後に生徒役の人がどんな気持ちになったかを体感してもらうのだ。皆さんはどのような対話の展開になるとイメージしただろうか。例えば、「大丈夫だよ」というような言葉かけを考えた先生もいるだろうが、その結果、生徒は前向きな気持ちになって対話を締めくくることができただろうか(ワークの解説については34ページの三川教授インタビューを参照)。

こうした知識をふまえて、キャリア・カウンセリングの視点から学校活動のすべての場面で、生徒との対話を見直して実践しているのが、沖縄県立北谷高校だ。さらに北谷高校では昨年からはキャリア・パスポートに取り組み、生徒たちが自分の活動を振り返り、自分の言葉で記録することを始めている。

次ページから北谷高校の取り組みを通じて、教師と生徒の対話の重要性について考えてみたい。



図1 北谷高校の取り組みの流れ(2017年度)



Case Study

キャリア・カウンセリング  
実践事例

生徒が自らキャリアを考えられるようになる、  
対話のスキルを全教員が共有し  
生徒の日常の姿勢が変容

取り組みの背景

生徒と教員の距離が近い  
校風を活かして対話を改善

沖縄県では県教育委員会が、キャリア  
ア教育支援事業として5校の高校を

指定している。その1校が北谷高校だ。同校が2017年度の研究テーマとして掲げたのが「キャリア・カウンセリングの視点を取り入れた生徒指導」だ。このテーマを設定するにあたり、現状の生徒たちの課題を精査することから始まった。

まず、教員全員参加による研修で、自校の生徒の強み弱みを、KJ法を用いて洗い出した。その結果、明るく素直で他者を受け入れる優しさをもつ一方で、自分の意思や気持ちを表現したり、先を見通して行動することに課題が見えてきた。また、生徒アンケートから、自己肯定感がやや低いことも見えてきた。同校を第2志望として入学する生徒も少なくないため、自信が欠如していたり、入学時点での生徒の意識に温度差があることも考えられた。

同校が目標とする育成像は、「自分の未来をデザインできる生徒」だ。浮き彫りになった課題をもつ生徒たちを、この目標に向かわせるために何をすべ

きかを検討したとき、「教職員と生徒の距離が近い」という同校がもつ風土が功を奏すると、進路指導の手登根洋子先生は考えたという。

「本校ではもともと、生徒と教員がどこでも会話する校風があります。合理的配慮が必要な生徒が多い側面から、毎年4月に研修を行い、生徒と向き合い、声をかけあう土壌ができています。それは特定の生徒だけでなく、すべての生徒に対してです。この風土を活かし、日々行われている会話をキャリア・カウンセリングの視点で意識することで、生徒の成長を促すことができな

かと考えました(手登根先生)

日頃の生徒とのコミュニケーションをキャリア・カウンセリング的な対話とすることで、生徒を「きちんとした言葉遣い」ができ、自分の意思や気持ちを表現できる、「前向きに考え、計画的に行動することができるよう」にすることを、研究の目標と設定した。

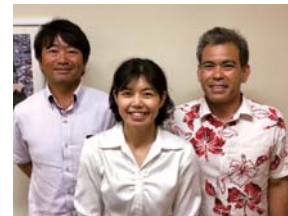
キャリア・カウンセリング的な対話により生徒たちの成長を促すとはいえ、それが具体的に、今までの生徒との会話とどう異なるのか、どのように学校活動の中に浸透させていけばよいのかはわからなかった。そこで、文部科学省の長田 徹氏を招聘し、同校のキャリア委員会の教職員対象に研修を実施。長田氏から助言されたことは、キャリア・カウンセリングに対する教職員の「マインドの統一」と、「スキルの共有」の重要性だった。

「生徒を受け入れるマインドは教員全員にある学校なので、生徒のためにコミュニケーションを実施することについて異論を唱える先生はいませんでした(功刀弘之教頭)

一方で、スキルについては、

取り組みの内容

教員間のマインドの統一と  
スキルの共有が重要



写真左から功刀弘之教頭、  
手登根洋子先生(進路指導)、  
小橋川哲先生(教務主任)

図3

生徒指導

先生 部活どんな感じ? 楽しい?

生徒 楽しいよ

先生 クラスは楽しい?

生徒 うん、楽しい

先生 誰と友達してるの?

生徒 クラスだったら〇〇と仲良くしてるよー

先生 進路はどんな感じ?

生徒 まだ親に反対されてます

先生 そっかあ。でも保護者とのお話も大事だもんね

生徒 うん、また話してみる

先生 はーい、何かあったら言ってね

放課後、教室に残っている生徒に満遍なく話しかけている会話の一コマ。いつもひとりである生徒や、いじられていそうな生徒は気に留めて声をかけるようにしている。何気ない会話から生徒の気持ちを引き出し、進路の話にふれて、状況を聞き出すことができた。

図2

教科指導

先生 今度の小テストはできたね?

生徒 わからなかった

先生 勉強はどれくらいやったの?

生徒 △△くらい

先生 あんまり勉強できてないねー

生徒 はい

先生 どんな勉強してるの?

生徒 □□とか

先生 数学とか英語ばかりやってるさー。復習ができてないんじゃない? どこかがわからないの?

生徒 ○〇がわからない

先生 算数でつまづいているね

生徒 計算が他人より遅いです…

先生 あなたのペースでやったらいいんだよ

授業のペースについていけず、放課後の補習の場面での会話。特進クラスで成績はよいが理数系が苦手な生徒。勉強量や勉強方法を引き出し、どこでつまづいているかを本人が気付けるような対話が可能だった。

「教員は経験を重ねる傾向があるため、過去の生徒に対する指導経験と照らし合わせて、『君はこういうタイプだからこうしろ』という指示になりがちです。しかし、それは生徒が主体的に出した答えではありません。生徒が自ら自分のキャリアを考えられるように働きかけなければいけない、これこそがキャリア教育だと気付かされました」(小橋川哲先生)

**生徒に「指示」するのではなく自ら気付くように「導く」**

そこで、キャリア・カウンセリングのスキルを会得し共有するために、追手門学院大学の三川教授による、全教職員対象の研修を行うこととした。高校現場でのキャリア・カウンセリングの必要性と、キャリア・カウンセリングを実施する際に生徒との対話で気をつけたい態度や言葉かけなど、より実践的な内容に踏み込んだ研修となった。

三川教授から伝えられた生徒とのコミュニケーションのポイントは、生徒の話を「聴く」と、「受け止める」ことだ(詳細は34ページ参照)。つまり、生徒が自ら考えられる力を付けるには、教員が多くを語るのではなく、まずは生徒が語り始めるような声かけをし、生徒が語り始めた話をよく聴き、教員の意志ではなく本人が客観的に自分を見られるように対話を進めていくことだ。

教員はよかれと思って、生徒に解決

策を提示してしまうことがあるが、それは「指示」であって「指導」ではないと先生たちは気付いたという。

「そのことに気付いてから、生徒への声かけの仕方が変わっていききました。本人が自分で課題に気付くことで、やるべきことを見えてきて、ポジティブに将来のことを考えられるように導くことです。こうしたコミュニケーションのスキルを身に付けることが、教員としてあらゆる場面で生徒と接する際の糧になると思いました」(手登根先生)

「三川先生の研修を受けて、自分自身ができることと、できていないことを整理することができました。今までも生徒と頻りに話してきましたが、日常の会話がキャリア教育に結びつくとは意識していませんでした。どんな対話でも生徒の自己理解を深めることに結びつく意識するだけで、変わっていると実感しています」(小橋川先生)

**実施した取り組みを事例化した全教員で振り返り、改善する**

このようにして、北谷高校のすべての教職員が、生徒との対話でキャリア・カウンセリングを意識するようになってきた。その対話の例が上の図2から図5だ。実際に先生たちがどんな声かけをして、その結果がどうだったかを、手登根先生が現場の先生たちにインタビューをしてまとめた二部を紹介している。対話はあらゆる学校活動の中で行われるため、「教科指導」「生徒指導」「部活指





や生徒との接し方に変化があった」と回答し、「生徒たちが自分の気持ちを表現できるように変化してきた」と回答した教員も76%に上る。図6の「教員から見た自身と生徒の変化」のコメントのように、「教員が変わることで生徒が変わる」と、多数の先生が実感している。

「生徒に寄り添った対話をするようになったことで、生徒が学校は安心な場と受け止め、自分の気持ちをより素直に話せるようになったようです。けれど、本校では以前から生徒との会話が多かったので、生徒たちは教員や自身の変化にまだ気付いていないかもしれない」（手登根先生）

しかし、会話がもともと多かったからこそ、今まで何気なく使っていた言葉を注意しながら話したり、教員の言葉数よりも生徒の言葉を引き出すことに負担はなかったのだろうか？

「例えば、『大丈夫』と安易に言っているじゃないことなどは新鮮な発見でしたが、『使う場面が間違っていたんだね』という認識で、負担ではありませんでした」（手登根先生）

「生徒が言葉を発したときに、今までは深く考えずに会話を続けていたのですが、すぐには返さずに、一旦受け止めて間をおく習慣はついてきたと思います」（小橋川先生）

キャリア・カウンセリング的な対話の意識を、教員たちが常に意識して忘れないようにするために作成したのが、図

図6 教員から見た自身と生徒の変化

※キャリア・カウンセリングアンケート結果より

- 生徒の課題を解決する方法を提示するのではなく、どのようにしたら課題を克服できるか、生徒に寄り添う意識ができた。
- 「できないこと」を叱るのではなく、なぜそうなのか、どう取り組みたいか自分で考えさせること、見通しをもたせるよう意識した。
- 進路のことでイライラし態度が悪い生徒がいたが、意見を述べるのが上手な生徒であるため、面接練習の手本として皆の前で褒めるなどしていたら、性格も良くなり今までの悪態を反省し謝ってきた。
- 教師側が落ち着いて聞く姿勢で接したら、生徒も次第に落ち着いてきた。
- 生徒が発言したことに対して、何を言いたいのか考えるようになった。すぐに「大丈夫」や「何とかかなる」ということを言わないように、気を付けるようになった。
- 生徒の考えを引き出すために、生徒が何を感じているのか何を言いたいのか待つようにしたら、少しではあるが生徒がしゃべるようになった。

7のカードだ。三川先生から受けた研修のエッセンスをポイントにまとめて、いつでも持ち歩けるサイズのカードにして全教員に配付した。

「時間が経てば忘れてしまうこともありますし、新しく来た先生たちにも簡単に共有できる仕組みとして考えました」（手登根先生）

### 教科授業でも対話を工夫しさらに校風として根付かせる

今後はキャリア・カウンセリング的な対話を、もっと教科授業にも落とし込んでいきたいと手登根先生は語る。

「最近生徒の方から『今日の授業の目標は何ですか？』と聞いてくるようになり、ハッとしました。どの教員も授業のその日の目標を黒板に書くことは今までもやっていたのですが、お題目と

してだけの目標ではなく、『今日は何をできるようにする授業なのか？』を生徒自身が考えるようになってきたのです。常に意味や理由を考える対話をしてきたことで、今学んでいることが何の役に立つのか、生徒が自分の先を見据えて授業に臨むように、変わるのだと感じました」（手登根先生）

キャリア・カウンセリングの施策だけの成果ではないが、北谷高校では3年間のキャリア教育支援事業を続ける中、昨年度は近年はいなかった国立大進学率が6名も出るなど、進学率が上がっただけでなく、就職する生徒も優良企業から内定を受けけるようになってきた。

「高校3年間、モチベーションを保って学び続ける姿勢ができてきていると思います」（功刀教頭）

図7 キャリア・カウンセリングを常時意識するための施策

三川先生の研修でのポイントを、名刺サイズのカードにまとめてラミネート加工したものを全教職員に配付。パスケースに入れて常時携帯する教員がいたり、いつも見えるところに貼るなど、リマインダーとして機能している。

「キャリア・カウンセリングは教員の意識を変えるだけでなく、比較的取り組みやすい施策だと思います。今後も研修を続けながら、本校のカラーとして根付かせていきたいと考えています」（手登根先生）



図9

1学期の終わりに記入するシート。学期をふり返り、学習面、生活面で各10点満点での達成度や、印象に残った出来事を記入する。

図8

1年生が入学したときに記入するシート。高校生活で身に付けたいこと、大切にしたいこと、1学期で真似したいことなどを記入する。

「キャリア・パスポート」の導入

生徒の素直な気持ちが出  
生徒の見方が理解できてくる

次期学習指導要領の答申で「キャリア・パスポート」について記述されたことを受け、沖縄県ではキャリア教育支援事業の指定校の5校が先行して取り組むことになった。北谷高校では昨年の4月から自校の生徒の状況に合わせて「キャリア・パスポート」を作成し、運用し始めている。

「キャリア・パスポートとは何かを考

### 沖縄県教育委員会 平成29年度 キャリア教育支援事業の取り組み

#### キャリア・パスポートを研究し 有効活用を進める嘉手納高校

沖縄県教育委員会はキャリア教育支援事業(平成27~29年度)として、石川高校、嘉手納高校、北谷高校、宜野湾高校、豊見城南高校の5校を指定。その取り組みの一環として「キャリア・パスポート」の策定をはじめ、主体的・対話的で深い学びへの授業改善など、学校ごとのテーマ研究に取り組んだ。

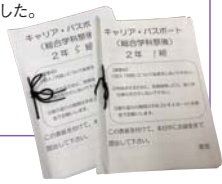
その中で、「キャリア・パスポート」を研究テーマとしたのが嘉手納高校だ。同校は120ページに及ぶ独自の「進路のしおり」でキャリア教育に当たってきたが、それを一新し「キャリア・パスポート」と合体させる計画がある。昨年は、10月に行った総合的な学習の時間の発表会後に1回のみ「キャリア・パスポート」の記入を実施。見えてきた課題を次年度からの運用に活かそうとしている。

「フォーマットには生徒が自己評価できるルーブリックを入れ、その他の項目は具体的な設問にし、記入欄は小さめにしました。しかし、半年間を振り返らせるのは期間が長すぎたため、今年度からは年5回程度にする予定です。キャリア・パスポートはキャリア教育の多数の施策を有機的に結びつけ、教員が個々の生徒と目線を合わせて進路を考えていくツールとなると期待しています」(清家 洋先生)



「キャリア・パスポート」記入の留意として「教員が助言しないこと」「完成のために持ち帰らせないこと」などを教員に徹底した。

嘉手納高校・  
進路指導部  
清家 洋先生



たときに、進路の際に志望理由書を生徒が自分の力で書くために有効なツールだと思いました(手登根先生)

独自の視点として「学ぶは真似ぶ」という、見習いたい人を具体的にあげて、その人のどんなところを真似たいかを書く欄を設けている。学期始めには目標として、学期の終わりににはどれだけ真似られたかを書く。また、学校活動だけでなく、校外での習い事やアルバイトなど、生徒のキャリア発達に関わることを含めている。

「キャリア・パスポートを教員がどう見るべきかも三川先生からアドバイスいただきました。生徒が素直な気持ちで書いているものなので、いま何を感じているかを丸々受け止めることが大事で、生徒との対話をさらに広げる手立てになるはずだ。教員は誤字などをチェックしがちですが、それは教科ですべき指導で、キャリア・パスポートでは生徒がどんな気持ちで書いているかを、

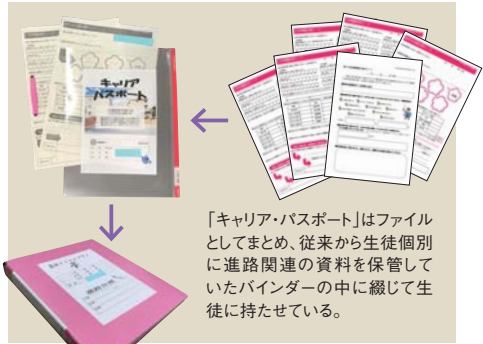
そのために、生徒が自分の成長を言語化しやすいフォーマットにすることを考え、各学期の始めと終わり(図8・9参照)、行事のときと、年間6回記入することとした。学年によってフォーマットは異なる。

「キャリア・パスポートを教員がどう見るべきかも三川先生からアドバイスいただきました。生徒が素直な気持ちで書いているものなので、いま何を感じているかを丸々受け止めることが大事で、生徒との対話をさらに広げる手立てになるはずだ。教員は誤字などをチェックしがちですが、それは教科ですべき指導で、キャリア・パスポートでは生徒がどんな気持ちで書いているかを、

教員が考えながら読み取らなければならないと気付きました(手登根先生)

本格的な運用はこれからだが、生徒の見方を教員が理解できるツールとして、改良しながら役立てて行こうとしている。

図10 「キャリア・パスポート」の運用方法



「キャリア・パスポート」はファイルとしてまとめ、従来から生徒個別に進路関連の資料を保管していたバインダーの中に綴じて生徒に持たせている。